



第47号 2024.10.10発行  
 発行者：株式会社コロラボ  
 編集者：JO編集委員会

# 自分の1メートル先の 小さな気づきを大切にしたい

横浜市議員

荻原隆宏さん



1970年生まれ。ドイツ・フランス・アルジェリア・イギリス・日本の5か国で育つ。早大文卒。阪神淡路大震災被災後、アルバイトや会社員、代議士秘書を経て2007年横浜市議会議員初当選。2012年と2014年の衆院選に挑戦するも落選。参議院議員秘書、知的障がい者入所施設勤務を経て2019年再び西区で横浜市議会議員当選。2023年4期目当選後の夏に直腸がんが見つかると、左足リンパ節への転移もありステージ3cと診断される。がん摘出手術を受け人工肛門を造設、障がい4級の身体障がい者となる。現在抗がん剤治療を続けながら市議員として精力的に活動中。  
<https://www.ogihara-takahiro.com>



江森：荻原さんとはもうずいぶん前に確かNPOの事業にご協力いただいたから、すっかりご無沙汰してしまっていました。まず、荻原さんのキャリア、議員になる前ぐらいから伺えればと思います。

荻原：政治に関わるようになったのは30歳ちょっと過ぎたぐらいですかね。それまでは自分が政治家になるなんて、もうこれっぽっちも思っていなかったですね。20代の頃はミュージシャンを目指してたんで。

江森：えーっ！どんな？

荻原：まあ弾き語りというか、そんなかったいいもんじゃないです。鳴かず飛ばずで全然ダメでした。それでいよいよ30が近づいてきたんで、音楽を諦めて就職活動を始めたんです。そんなとき偶然早稲田出身の民主党の代議士が若い人を探しているっていうので、それならちょっとやってみよう

かと、永田町の議員会館で働き始めました。前日までは駐車場整理とトイレ掃除のアルバイトだったのが、翌日から永田町。その落差、格差に衝撃を受けたのを覚えていいます。

江森：かなり特殊な場所ですからね。

荻原：ですが僕はもう本当に無知で、税金って何？国保って？年金って？という感じだったのでビジネス鍛えられましたね。でも世界を上から見せてもらったというか、社会ってこういうふうにできているんだというのを教えていただけましたという意味では貴重な経験でした。その後の選挙で私が仕えていた代議士が落選して政治を引退してしまっただけで、僕も会社を紹介してもらって輸入時計の営業マンになりました。しばらくサラリーマンをやりながらいろいろ考えたんですね。自分で社会を変えたいという

ことを。当時は就職氷河期で格差問題が徐々にクローズアップされてきた時代でもありましたが、自ら信を問うてみようという気持ちで湧いてきまして、代議士に相談したところ、私は反対だけどどうしてもやりたいたいというんだしたら地方議員から、しかも無所属でやりなさいとアドバイスしてくれました。

僕は父の仕事の関係で、3歳から海外含めあちこち転々としていたので、出身地といえるところがないのですが、その頃知り合いが一番多かった横浜、中でもこれから開発されていく西区だったら自分を受け入れてくれる余地があるんじゃないかということでも西区に引っ越してきました。

こちらに来てから立候補の準備を始めて、それこそ昼夜問わず働いて、一時は体重が45kgまでになって危ないときもあったので

ですが、たくさんの人に助けられてようやく民主党の西区公認をもらうことができて、それで2007年の統一地方選に初当選させていただきました。その後2009年の政権交代、2011年の東日本大震災を経て、2012年に再び民主党が下野することになるのですが、選挙の前から民主党が負けるとわかっていたので、もうみんな逃げ腰だったんですね。でも僕はこういうときこそ政権党としての説明責任を果たすべきだということで、市会議員を辞職して神奈川県4区から衆院選に立候補しました。結果はポロ負けでした。次の選挙でもポロ負けして、金も何もかも失って、もう政治はやめようと思ったのですが、秘書の手伝いなどをやっているうちに、やっぱり自分でもやらなきゃダメだと思うようになって、もう1回ゼロからやろうと、ゼロからやると



きは西区だと思って西区に戻ってきました。知的障害の方の入施設に頼み込んで1年間働かせてもらって2019年の統一地方選で再度当選させていただきました。

江森…そこがすごいですね。みなさん覚えてるわけですね、4区に行った荻原だって。怒られなかった？

荻原…覚えてくださったってましたし、当然その批判もありましたが、よく戻ってきたと言ってくださる方が多かったですね。歩けば歩くほど応援してくださる方がいると実感できてね。政治家やらせていただいて初めてでしたね。ありがたかったです。

江森…荻原さんは現在直腸がんの治療中ということですが、これはいつ頃発覚したのですか。

荻原…去年の8月30日です。それまでも出血はしていたのですが、そのままにしていたら、だんだん痛みがひどくなって、体は重いし、いよいよ日常生活もつらくなってきたので、検査に行ったら判明しました。すぐに手術をしたのですが、肛門に近いということで肛門もとって、それ以来人工肛門で生活しています。手術のときに神経に触ってしまっても足も痺れていてうまく歩けない状態です。

江森…そんな大変なときに取材を受けていただいて大変恐縮ですが、私が伺いたい

は会社を経営している者として、社員が大きな病気にかかったときに、もちろん人によって違うんですけど、会社としてどういうサポートをすれば良いのかということですか。

荻原…これはやはり雇用継続ですよ。これが一番です。もちろん仕事ができる方とできない方がいますから、できる方には両立支援、できない方には休暇制度ですね。休暇制度というのは各事業者が自由に設定できますので、会社に籍を置きながら休める制度を作ってあげて、健康保険の傷病給付金を受けながら休職するということになりません。

江森…期間や給付率というのは、健保組合によって違うということですね。

荻原…そうですね。会社によってはある程度保障してくれたりもするので、会社によってだいたいが差が出ると思います。いずれにしても休暇を取らなければ給付金も出ませんので、まずは休暇制度があるのが前提です。その上で会社からも支援があって、復職に関してもきちんと決まりがあるというのが理想です。

両立支援の場合は、まず本人がどういう状態であるかということの把握が大事です。本人に希望がなくても主治医がこうした方がいいということもありますので、主治医の指示書や意見書を参考にするのが良いと思います。ご本人からも会社からも請求できます。どういう職種なのかということも主治医も知っておく必要があるんで、患者と医者とも会社でコミュニケーションを取れるような環境を作っておくと良いですね。また産業医さんがいる場合は、産業医さんが主治医と連絡を取るという手もあります。

江森…医療費も高額でしょうから、やはり収入面は心配ですよね。議員さんには傷病手当あるんですか？

荻原…これがないんですね。議員はみんな国民健康保険なので、傷病手当というのはないんですよ。

江森…休暇制度は？

荻原…休暇制度もないです。育休は最近できたんですけどね。

江森…当事者になってみて、社会の制度とか人々の無意識な差別とか、これはちょっと困ったなということはあります。

荻原…私自身そんなに強く感じることはないです。というのは、今は自分に起こっていることに対して、自分の気持ちを楽しくポジティブに考えるということにすごく集中しているんですね、意識が。だから今はあんまりネガティブな意識が入ってこないです。変に聞こえるかもしれないですけど全部輝いて見えます。文句一つない。

ただ、後から考えてみたら社会がこうあった方がいいねって気づいたりすることは徐々に出てくるかもしれません。例えば、最初の頃杖ついてたんですけど、そうすると世の中の道って全部斜めだったんだということに気付くんですよ。雨を流すためには必要なことなんですけど、足が不自由な人にはとても大変なんです。そういうことは今後出てくると思います。

江森…この社会があってくれただけでありがたいという感じ？

荻原…そうとも言えますし、この社会はそもそも素晴らしい。そもそもそれが見えてない自分がいたということかな。でも議員としては、病気の方や障害のある方にとっ

いて政策に生かしていきたいと思えますね。江森…今力を入れていっている政策というのはどのような分野ですか。

荻原…福祉、それも障害者分野ですね。同じ福祉分野でも保育や介護に比べて障害者分野はどうしても遅れがちなので、もっとスポットライトを当てていきたいですね。

江森…具体的にはどんな課題がありますか。荻原…一番は職員の給料の差ですね。基本的に介護分野に比べて障害分野は給料が安い。ですから働く人も不足しています。行政も政治もどうしても介護優先になりがちなので、まずは働く人たちが障害者福祉の世界で働いて、一生の展望が持てるような職場にすることが必要です。それと、障害者福祉については待機者も問題です。福祉の分野にも施設に入れるのを待っている待機者がいるのですが、横浜市では介護の方は把握しているのに、障害者の方は把握していないんですよ。これは2019年の当選時からずっと言っていますが、いまだに行政からの回答が二転三転してよくわかりません。無所属になって市長に直接聞けるようになりましたので、どんどん質問していきたいですね。

江森…これからこういう活動をしていきたいですか。

荻原…衆院選に挑戦していたときには、ものすごい遠くを見すぎていたと思うんですけど、それで結果的には到達できなかった。今は1メートル先を見て進んでいくことと想っています。そうするとね、いろいろ気づきがあるんですよ。それが愛おしいというか、小さいことかもしれないけれど、これを育てていこうと心から思える。そういう気持ちを大切にしていきたいですね。

# 【クラファン情報】「ヘルシーな関係」を親子で学べる絵本で暴力のない未来へ！

コロナボTODAYの記事でも紹介している、認定NPO法人エンパワメントかながわが、創立20周年を記念してクラウドファンディングに挑戦しています。

エンパワメントかながわは、「暴力のない社会の実現」を目指して、子どもへの暴力防止プログラム「CAP」、デートDV予防プログラムなどのワークショップ開催や、デートDV110番などの相談事業を全国規模で展開するNPOで、当社も「母校にCAPを贈ろうプロジェクト」で協力しています。

この20年間で、こども基本法の施行や性

行為に関する刑法の改正など、暴力を取り巻く社会環境は少しずつ改善されてきましたが、いまだ社会には暴力があふれてしまっています。

エンパワメントかながわでは、次の20年に向けて、「ヘルシーな関係」をキーワードに新たなステージへ活動を進めていこうとしています。ヘルシーな関係とは、お互いの違いを認めあい、大切にしたい（尊重しあえる）、対等な関係のことです。海外では、ヘルシー・リレーションシップ (Healthy relationship)、アンヘルシー・リレーションシップ (unhealthy relationship) として啓発

が行われています。ヘルシーでない関係とは「いやだ」と思っているも「いやだ」と言えない関係、あるいは「いやだ」と伝えずともやめてもらえない関係のことで、暴力が起こりやすい関係です。

これまでの活動の中で、恋人間に起こる暴力である「デートDV」当事者は、それ以前に親子間でヘルシーでない関係を経験していることが多いということがわかってきます。

子どもにとっての最初の社会である「家庭、親子」において、幼少期の子どもとそ

体が広がっていくことが、暴力防止につながるのではないのでしょうか。

今回のプロジェクトでは、ヘルシーな関係を学べる絵本を製作し、まずは親子で学べるきっかけを作っていきます。ゆくゆくは絵本を活用したワークショップの開発、ワークショップの担い手養成講座なども行っていきたいとのこと

です。  
暴力のない未来に向けて、エンパワメントかながわの挑戦に是非ご協力をお願いします。



↑クラファンへのご協力はこちらから

## 毎日ラジオ、深夜にYouTube、週末レコード、たまにフェス

竹見正一

8月18日/日曜日/23時

初夏、義父が倒れた。血液の病で放っておくと2ヶ月もたないとのこと。そもそも屈強な義父で、彼を知る誰もが病気とは無縁だと思いついていたこともあり、皆混乱を隠しきれなかった。義父は50歳をすぎた頃から、俺が倒れたらこの文書を院長に渡してくれ、と、嘆願書を作成するほど延命を拒んでいた。もちろん、それが残された家族への思いやりだということは、義父の日頃の行動から十分すぎるくらい皆に伝わっていた。案の定、可能性があるからと説明する担当医に、治療を拒絶し続けた。そして息も絶え絶えになった入院3日目の夕方、状況が変わった。担当医から改めて治療説明を受けている時、同席していた義母が、急に立ち上がり強い語気で「頑張って」とひとこと。義父は、浅い呼吸でしばらくうつむき、「1回だけやるか」と抗がん剤治療を受け入れた。そして昨日、退院した。ふたまわり小さくなった義父が言う。「ありがとう、ありがとう」「甘えてごめん」。

死の淵を彷徨ってから、まだ氣を使う。そんな彼に会うため、明日もたくさんの方が家にやってくる。



“カザミドリ一回は飛んでみる  
追い風になるまで”

曲：風の向きが変わって  
MONO NO AWARE

9月7日/土曜日/13時

ミレニアム騒ぎから10年ほど経った師走、私は都内某所で町工場を探していた。水路を渡った先に明朝体の看板。ここだ。引き戸を動かすと、機械のそばに鋭い目つきの大男。「あ、電話をくれた方ね」「うまいコーヒー飲む？」物腰は軽快で爽快。仕事の話をする、懇切丁寧に機械の説明までしてくださった。「俺のテンキンは東京イチ」という言葉をもらって工場を出た時には、何もしていない私なのに、心は強気になっていた。

その日からのお付き合い。いつも期待以上の仕事をしてくださった。それから6年後の9月、相談したくてかけた電話で訃報を聞く。早々に伺って、手を合わせた。「テンキンはうちが日本初です。初代が明治に始めて夫は3代目でした」「多くの職人さんが、うちから独立していきましたよ」と、奥さん。そんな話、聞いてないよ!!と動揺しつつ「俺が知らない宿屋はモグリだ」と彼が話していたことを思い出し、涙を堪えた。そして今日も奥さんが入れてくれたドリップコーヒーを、一気に飲み干した。

9月にこの町に来ると思い出す。職人が好き。やっぱり、職人が好き。



“いつかどこかで  
この唄を聞いてくれるといい”

曲：センチメンタル  
THE TLAUTS

## 今年も熱い夏！ 9名のインターン生を受け入れ

毎年恒例となった夏期インターンシップ。今年も5月〜9月にかけて、高校生1名、台湾生1名、大学生7名を受け入れました。

今年は、コロナで中断していた（台湾政府×横浜市）のインターンシッププログラムが4年ぶりに復活。台湾政府が運営する台湾国際企業人材育成センター（ITTC）で、外国語での企業実務を学んでいる学生の、日本での企業研修プログラムが実施され、当社も受け入れに協力しました。

中断していた間に、学校そのものが2年制から1年制に変わったことで日本語を学ぶ期間が大幅に短縮され、有意義な研修ができるのか、そもそもコミュニケーションがとれるのかなど、不安を抱えた中でのスタートでしたが、研修生の頼瑤伊さんは元気いっぱい。明るい笑顔で3週間の研修を有意義に過ごしてくれました。

研修では社内業務をひと通り体験してもらった後、恒例のありがとっの日企画にチャレンジ。夏休みで毎日の献立を考えるのが大変という保護者向けに「1週間の台湾料理レシピBook」を企画。短期間ではありましたが、7品のおいしいそうなイラスト付きの台湾料理レシピブックが完成し、報告会で参加者に配布することができました。

意欲があり、何事にも前向きな頼伊さんにたくさんのエネルギーをわけてもらった3週間でした。



台湾からの研修生頼瑤伊さん（中央）  
横浜市の研修生（左）と  
台湾で流行りの「歯痛ポーズ」



## 暴力のない未来を！ CAPを子どもたちに届けました

毎年夏休み前に子どもたちに贈り続けている暴力防止プログラム「CAP」。今年も認定NPO法人エンパワメントかながわの協力により、大口小学校の3年生にプレゼントすることができました。

CAPプログラムとは、いじめ、虐待、体罰、誘拐、痴漢、性暴力など、さまざまな暴力から子どもたちの心と身体を守るための予防教育プログラムです。

CAPでは、「暴力はいけない」とはひと言も教えません。ただ「みんなには権利がある」ということだけを教えます。すると子どもは「わたしに権利があるのだから、友だちにもあるはず」ということをすぐに理解し、「友だちの権利を無理やり（暴力で）奪ってはいけない」ということを学びます。授業が終わってから「いじめをやめたいのだけど、どうしたらいい？」と相談にくる子どももいるそうです。

暴力のない未来に向けて、これからも子どもたちを見守り続けたいと思います。



## 6月ありがとっの日 「歩いて帰る日」で防災訓練

もしも大災害が起きたら歩いて帰宅することになるかもしれません。何事も事前準備が大切ということで「歩いて帰る日」を開催しました。社員の防災訓練、避難所などの場所確認、そして歩くことでの健康増進にも繋がる企画です。

実施にあたり、まず社員一人ひとりにカスタマイズされた最寄駅までのマップを作りました。マップには避難所の他に津波避難ビル、また帰宅困難者一時滞在施設や災害時帰宅支

援ステーションと  
いった施設を掲載。  
いざと言ったときに役立つ情報を盛り込みました。後日徒歩帰宅で気になった点を「気づいたことシート」に記入し提出。  
火災や落下物の危険など、実際に歩いたことでの気づきがたくさんあり、良い防災訓練になりました。



## キントーンを活用したDX化・ デジタル効率化紹介セミナーを開催

企業のDX化・デジタル効率化は、これからの時代に欠かすことのできない重要なポイントです。しかしデジタル化やDX推進には様々な悩みも付きものです。そこでコロボでは、現代の企業の悩みにフォーカスしDXの第一歩に繋がっていただけのセミナーを開催しています。

専門知識なしでも簡単にシステム構築ができるサイボウズ株式会社業務ソリューションプラットフォーム「Kintone」を例に、あくまでいちユーザーである弊社の立場から、どのようにDX化・デジタル化を進めていくべきか、これだけは知っておきたいポイントなどを公平な立場でご紹介します。  
開催情報はコロボマガジンのセミナー情報ページからご確認ください。



JO（ジェイ・オー）2024年10月号（第47号）  
発行者：株式会社コロボ  
横浜市神奈川区大口仲町108番地  
TEL：045（431）6611  
FAX：050（3730）6273  
URL：https://www.cocollabo.jp

